

大分県におけるハラアカコブカミキリの 生態並びに防除の試み（6）

——被害状況と防除効果について——

大分県林業水産部 黒木隆典 萩原幸弘
桑野功 緑政美
織田泰昌 友成明夫
児玉唯光 上村豊治

はじめに

昭和52年8月に県中部で発見されたこの害虫は、すでに定着、繁殖し、その被害は本県の椎茸産業にとって大きな障害となっている。幸い、国においても、53年度から大型プロジェクト研究として本格的な試験研究に着手され、関係県の試験研究機関とともに積極的な対策に取り組まれており、その成果が期待されている。

このことについては、前回は ①定着、繁殖の確認と分布現況、②生活史 ③臭化メチルによる実験防除 ④同実用化防除 ⑤臭化メチルによる害虫と菌糸に及ぼす影響について報告がなされたので、今回はその後の状況等について報告する。

1. 被害状況

52年度発見当時から54年秋季までの被害状況は図-1のとおりであり、被害発生町5町、区域面積150km²区域における被害材積は20km³に及び、前年と対比すると、区域面積で150%、被害材積で77%となっている。被害区域は外周に向けて徐々に拡大しているが、その速度は遅く、飛散距離も予想したより短かい、又、被害先端地域の害虫寄生密度は極めて低いようである。図-1に示すように、被害区域から離れて散発的に発生した被害は、羽化又は越冬後の成虫の飛散によるものと推定されているが、周辺地域に前年の脱出孔が認められることから、短期間に長距離の移動を行うとは考えられない。ただし、成虫脱出後、その周辺に産卵対象木がない場合、あるいは尾根筋等の通風良好な伏込地では一部産卵は行うものの、さらに良好な産卵場所を求めて移動するものと考えられる。

2. 防除方法と効果の検討

54年に採用した実験的防除の体系は図-2のとおりであり、新たに防虫ネットによる方法を追加実施した。

イ. 笠木及び林地残材等に対する薬剤散布

成虫の直接駆除と後食対象枝条部の薬剤による殺虫により、害虫の生息密度低下に大きな効果がある。しかし、原木に対する薬剤散布ができないうえに、害虫の寄生産卵を完全に防止することが困難であり、被害拡散防止策としては不安があるので、他の方法との併

用が必要であろう。

ロ. くん蒸

殺虫効果の面からみれば最も有効な方法であるが、多くの労力と時間を要するので、山地での大がかりな防除には限度がある。従って、この方法は主として突発的な被害地、又は移動原木の害虫駆除に適用することが得策であろう。なお、くん蒸にあたっては、高温、高濃度の処理をしないことはもちろん、処理後原木が直射日光にさらされないよう、笠木の補修を行うことが必要である。

ハ. 防虫ネット

原木伏込地はこの害虫にとって最適の餌場となっているので、原木をネットで被覆し産卵を防止するとともに、笠木や林地残材を餌木として利用し、これに飛来した成虫や幼虫を駆除する方法であり、原木への害虫の寄生を完全にシャ断することができる。又、産卵後に設置することにより、羽化した成虫の拡散防止にも利用することができる。

今年の試行結果によれば、害虫によるネットの噛み破りや通風不良等の障害が認められなかったので、適期の設置と原木伏込み方法の改善により、さらに効果をあげることが期待される。

まとめ

54年度は、緊急実験防除として種々の防除法を検討し、関係機関と協力して被害防止に努めてきた。その結果、前年に比べ、害虫の生息密度は急激に低下し、被害区域の拡大も最小限度に食い止めることができた。

今後は、さらに現地の実情に合った防除方法を検討し、防除の目的を害虫の密度低下と拡散防止に区分して考える必要があろう。すなわち、害虫定着後の激害地では、薬剤散布と餌木誘殺を併用する方法や伏込方法の改善により密度低下をはかり、被害を一定水準以下に押え込むようにし、被害先端地域では防虫ネットの使用や、周辺の予防散布が必要であろう。又、被害地域からの原木移動については、従来どおり原則として禁止し、やむを得ない場合は二夏経過後に移動するか、くん蒸処理を行うよう指導して行きたい。

しかし、二夏経過後の椎茸菌糸の伸長の遅いほど木についても一部産卵がみられ、幼虫、蛹、成虫が確認

されたので、移動については細心の注意が必要である。
最後に、当然のことであるが、自然食品としての椎茸のイメージを失わないよう、防除にあたっては充分注意を払い、原木径級別伏込み、伏込み場所の改善、

餌木誘殺など、生態的防除を併用した防除を進めるとともに、原木の早期ほど化、被害原木の移動による人為的拡散の防止に努めて行きたい。

図-1 ハラアカコブカミキリ被害分布図

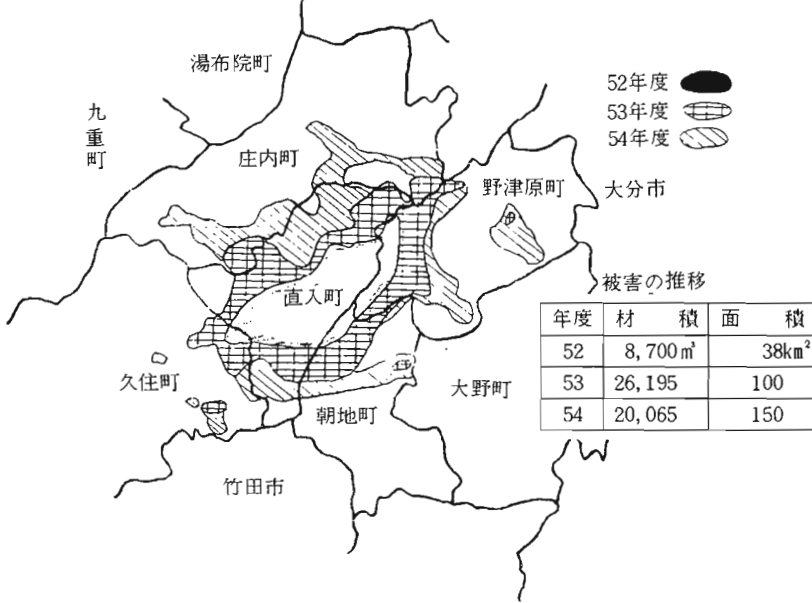


図-2 ハラアカコブカミキリ防除技術体系

